

ぐらじまの 海

2026年 第30巻第1号

114



イベント「館長と歩こう夜の水族館」



館長の仕事	2.3
いるかの時間・あざらしの時間	
「当館生まれのレイがマリンワールド海の中道へ」	4
ここがみどころ「2階：アマミスズメダイ」	5
錦江湾のなかまたち「110. ウツボ」	5
アクアラボ「イルカ水路って？～イルカ水路を楽しむ方法～」	6
「HITODE★EXPO 2026 かがしまヒトデ博覧会」	6
世界初！アカオビハナダイの繁殖に成功	7
いおワールド通信	8
鹿児島 未知の魚を発見！	
「No. 43ツバサキントキ No. 44アカネキントキ」	8

かんちょう しごと 館長の仕事

今回は、かごしま水族館の館長が普段どのような仕事をしているのか、またどのような思いや意図を持って仕事をしているのかを紹介します。

水族館の屋外にあるイルカ水路で、長いタモ網を持って作業していると、小さな男の子が近づいてきて「何してるの?」「魚を捕まえているの?」と声をかけてくれました。「ゴミを取っているよ」と答えると、不思議そうな表情で「へえ、なんで?」と質問が続きました。「イルカが食べちゃうからね」と答えると、男の子は再び「なんで」と聞きました。「えさと間違えて食べちゃうんだよ」と答えると、お母さんが「お腹が痛くなるね」と続けました。すると男の子は「へえ、がんばってね!」と笑顔になりました。何気ない会話ですが、楽しくて嬉しい時間です。



海とつながる「イルカ水路」

水族館が提供する価値とは何か、水族館の役割は何かと、自問することがあります。来館された方から答えをいただきたいと思い、現場を歩き回ることが日課となっています。

館長の役割

かごしま水族館は、鹿児島市が「海を生かしたまちづくり」を推進するため、1997年5月に開館しました。この水族館は、鹿児島島の海や自然、生命の不思議、そして自然保護の大切さを学べる場所として設立されました。また、次世代を担う子どもたちが楽しく学べる教育施設であると同時に、観光振興に役立つことを目的としています。さらに、水族館の運営には、南北約600キロにわたって広がる鹿児島島の豊かな海と、多様な環境に生息する数多くの生きものが生かされています。職員は、生きものの生態や環境、そして生きものとの関わりから学べる鹿児島島の風土や文化を伝えることが大切な役割と考えています。そのた

め、「生きること」に限りなく「鹿児島の海にこだわり海を守り地域と共にある水族館」をテーマに、展示に取り組んでいます。



水族館と錦江湾と桜島

館長は、館の設置目的に沿って展示を円滑に運営するために、生きものの健康管理、来館者の安全確保、清掃、設備点検などを各部門と密接に連携して進め、館全体を統括します。あわせて、展示内容や教育プログラム、学校との連携など、展示に関する業務の責任者でもあります。

日々の業務

職員から提出される展示計画・実施報告・入館者数・売上などの運営報告書の確認、出張や勤務に関する書類の確認、外部からの依頼文への対応、予算執行の決裁・承認、各種書類の整理、館内外の会議への出席などがあります。業務内容は、一般企業の管理職と大きく変わらないのではないのでしょうか。一方で、水族館の館長業務で最も大切なのは、来館者に提供できる価値を職員とともに考え、実践することだと思います。



時にはデスクワーク



つるおかしりつかもすいぞくかん 鶴岡市立加茂水族館との姉妹館交流

令和6年度の文部科学省「社会教育調査」によると、全国には85の水族館があり、設置者もさまざま

で、各館が多様で特色ある活動を行っています。水族館には、小さなお子さまから高齢の方までさまざまな人々が来館されます。学び、楽しみ、考え、発見と再創造の場です。誰もが驚きと感動の中で新しい世界を知ることができる場所です。



会話する親子



イルカをより近くで

かごしま水族館では、世界最大の魚類であるジンベエザメやカツオ、キビナゴなど地域の生きものの展示を通して、「鹿児島島の海の多様性と今を伝える」ことを大切にしています。そして、地域や自然の価値が、地域の誇りや愛着につながると考えています。前号までのシリーズで紹介した各係の仕事は、展示やプログラム、ワークショップなどを通じて来館者に学びと体験を提供するものです。来館者は、海や生きものについて新しい発見や感動を得られます。



職員による水槽の清掃



ジンベエザメの展示



カツオ展示

館長のリーダーシップと今後の展望

館長は単なる決定者ではありません。価値観の多様化や文化の定義の変化を捉えながら、来館者や職員、設置者など関係者それぞれの声をまとめ、展示や運営に反映させます。さらに、水族館の取り組みを外部に発信する力も必要であり、それが信頼と持続性を築くうえで重要です。

かごしま水族館は、多くの職員の力で「学びと感動の発信拠点」として発展を続けています。館長は、公共性・文化性・経営性をつなぎ、関係者と共に価値をつくり続けるといった重要な役割を担います。

リーダーシップとは、「何のためにこの館を運営するのか」という問いに明確に答え、その思いを周囲と共有し、行動し続けることだと考えています。学校とは違った形での自発的で柔軟な学びや、展示を通じて共感を生み出す学習の場である意義も含めて、館長はこれからの時代に欠かせない存在でありたいと思います。



楽しく過ごせる水族館へ

水槽の前でイルカを眺めていると、若い女性が「飼育員になりたいです。必要な資格やスキルは何ですか」と質問してきました。「飼育員の資格はありません。なりたいという思いを周囲の人に伝え、夢をあきらめずに持ち続けることが大切です」と話すと、彼女は「それなら自信があります」と満面の笑顔になりました。彼女の夢が叶うことを願っています。



皆さまのお越しをお待ちしています!

（佐々木 章）

いるかの時間
あむらしの時間

当館生まれのレイが マリンワールド海の中道へ

「レイ」は2019年7月11日に当館のオス「ラスター」とメスの「カール」の間に生まれたメスのハンドウイルカです。名前は公募により令和元年に生まれたことから「レイ」と名付けられました。多くの来館者に見守られながら順調に成長し、繁殖が可能になる年齢が近づいてきました。当館にいるオスのハンドウイルカは血縁があるため、繁殖相手にはなりません。そこで、遺伝的な多様性を保ちつつ、飼育下での繁殖を実施していくため「ブリーディングローン（繁殖のために動物園や水族館同士で動物を貸し借りする制度）」を行う計画が立てられました。この制度を利用し、レイは福岡県の「マリンワールド海の中道」へ移動することになりました。

レイの移動日が決まり、当館のSNSやホームページ、ニュースで知った多くのお客さまがレイに会いに来てくださり、たくさんの思い出話や応援の言葉をいただきました。

水中で生活するイルカを移動させるのは大がかりな作業です。専用の輸送容器に入れ、トラックで陸路を移動する必要があります。4年前には当館生まれのイブが同じくブリーディングローンのためマリンワールド海の中道へ移動しており、現在も元気になっています。過去に輸送の経験があることは安心材料のひとつですが、移動が決まってからは受け入れ先であるマリンワールド海の中道のスタッフが来館され、レイの飼育状況の確認やレイができる動きとその合図の引き継ぎ、輸送方法などを確認し合い、輸送前日まで綿密に連絡を取り合いました。

そして、2026年3月17日にレイの輸送を実施しました。鹿児島から福岡への道中は両館のスタッフも特別な許可を得てトラックの荷台に乗車し、レイの状態に異変はないか、呼吸は安定しているかなど随時様子を観察しながら、水から出ている部分が乾燥しないように柄杓で水をかけ続けました。輸送中のレイはとても落ち着いていて特に大きな問題はなく、5時

間弱で到着しました。レイにとっては初めての屋外プールでしたが、呼吸や遊泳は安定していて、すぐにえさも食べたことで、両館のスタッフともようやく心から安心できました。



専用の輸送容器。クッションを敷き詰め、体半分程度が水から出ている部分が乾かないように、布で覆い、頻りに水をかける。



緊張の瞬間。プールに入れた後、体がしびれて泳げない場合に備え、ダイバーが待機。



到着後、飼育員の合図への反応も良好。すぐにえさも食べ、翌日の朝にはマリンワールド海の中道のスタッフによる健康チェックもOK!

マリンワールド海の中道からは現在も頻りにレイの近況のご連絡をいただいております。新しい環境にもなじみ、他のハンドウイルカとも良い関係ができています。いつの日か、レイがお母さんになることを楽しみにしています。
(土田 洋之)

ここが みどころ

2階：サンゴ礁水槽の アマミスズメダイ

かごしま水族館は、南北600kmにも及び鹿児島県の広大な海にすむ生きものを展示の主役としています。その中で、今回紹介する「アマミ」スズメダイは、奄美の名を冠する魚として欠かすことのできない存在です。



光の加減で色味が変わって見える

アマミスズメダイはスズメダイのなかまとしては大型の種で、最大で15cmほどまで成長します。また、幼魚と成魚は見た目が大きく異なるのも特徴の

ひとつで、幼魚の頃はコバルトブルーの縁取りが美しい魚ですが、成魚になると体は黒色、尾びれは白色の落ち着いた体色へと変化します。この体の色は図鑑などにも黒色と書かれていて、何色か聞かれば私も黒と答えますが、実は光の当たり具合によっては深い緑に見えることもあります。これは、水槽の前でじっくり観察した人だけが気づくことのできる、隠れた美しさです。

アマミスズメダイは、2階のサンゴ礁水槽で群れをなして泳いでいます。アクリルガラスの近くを泳いでいる時が体の色をじっくりと観察できるチャンスです。光の加減で変わる繊細な色味をぜひ間近でご覧ください。現在、展示している「アマミ」と名のつく魚は1種類のみですが、いつか他の「アマミ」と名のつく魚たちも皆さまに紹介したいと考えています。
(中村 政之)



アマミスズメダイを展示しているサンゴ礁水槽

KINKO-BAY 錦江湾の なかまたち

110. ウツボ



ウツボ

ウツボは温暖な海域の浅海に生息し、岩場やテトラポットをすみかにしています。昼間はじっとして夜になると巣穴から離れてえさとなる生きものを探します。肉食性でえさを捕まえるための鋭く尖った歯を持ち、小魚などを捕食する他に、タコを好んで捕らえます。ウツボは獲物を見つけたら噛みつき、タコなど大きな獲物の場合は全身を回転させて鋭い歯で食いちぎりながら食べ

ます。そして、飲み込むときはウツボに特有の「咽頭顎」を使った独特な食べ方をします。咽頭顎は捕まえた獲物を素早く飲み込むための第2の顎とも言える器官で、食道の入口あたりにあり、獲物を引き込むために前後に動きます。ウツボは2つの顎を使って、捕らえた魚を逃すことなく食べることができます。鹿児島ではウツボのことを気性が荒いという意味の「気猛」と呼ぶこともあります。鹿児島県大隅地方の佐多岬周辺では、古くからキダリ漁が行われ、冬には獲れたウツボを干物にします。軒下にウツボが干されている様子は佐多岬周辺の冬の風物詩です。
(吉田 明彦)



ウツボの咽頭顎



イルカ水路って!? ~イルカ水路を楽しむ方法~



イルカ水路を遊泳するハンドウイルカ

当館の屋外にはイルカ水路があります。イルカ水路は、館内に入らなくても生きものを観察することができる無料ゾーンです。このイルカ水路を利用し、ハンドウイルカやマンボウ、シイラ、ブリといった生きものを展示しています。中央エリアで

は、季節展示としてマンボウやシイラの展示を期間限定で行い、ブリは常設展示として1年中いつでも見ることができます。館内の水槽だけではなく、海とつながるイルカ水路の環境を生かして、さまざまな魚類の飼育展示を行っています。



イルカ水路を遊泳しているマンボウ

イルカ水路の北エリアでは、館内のプールからイルカ水路にイルカが出てきてのんびりと自由に泳ぐ「しおかぜイルカウォッチング」を実施しています。

アクアラボでは、イルカが館内から水路に出る方法や、イルカ水路での過ごし方などを紹介します。また、マンボウやシイラの季節展示、マンボウの独特な泳ぎ方など、イルカ水路の魚についても写真や動画で解説します。ぜひイルカ水路にも足を運んでみてください。(大瀬 智尋)

世界初!アカオビハナダイの繁殖に成功

アカオビハナダイとは?

アカオビハナダイ (*Pseudanthias rubrizonatus*) は、スズキ目ハナダイ科に属する全長1.5cmほどのハナダイのなかまで、南日本、西部太平洋に分布しています。特に錦江湾ではダイバーが潜ることのできる浅い海域で数百匹の大きな群れを見ることができ、錦江湾を代表する魚のひとつです。他のハナダイと同様に、メスからオスへと性転換をすることも知られています。当館では4階の桜島の水深20メートル付近を再現した水槽で飼育しています。



アカオビハナダイのオス



アカオビハナダイのメス

産卵を確認

2024年6月28日午前9時5分、朝の水槽見回りの最中に展示水槽でアカオビハナダイが産卵している様子を初めて観察しました。オスは体を震わせメスの前で急旋回を繰り返し、素早く水底に向かって泳ぎます。その後、体を激しく震わせたままメスに何度も寄り添い、メスと一緒に少し浮上して産卵します。激しい時は水槽内のオス5~6匹が一斉に求愛、産卵を繰り返します。その様子は桜の花びらが宙を舞っているかのような美しい光景です。これまでに51回の産卵を観察しましたが、産卵はすべて8時45分~11時3分までの午前中に行われました。これは錦江湾で観察されている産卵時間と同じ結果でした。



アカオビハナダイの求愛産卵行動を見てみよう

稚魚の育成に挑戦



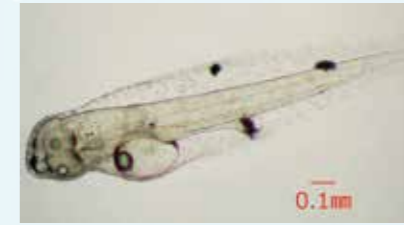
特製の採卵器



アカオビハナダイの卵

産卵を観察してからすぐに、卵を集めて育てることを試してみました。最初は産卵の直後に周りの他の個体が卵を食べてしまう様子を確認していたため、他の

個体に食べられる前に卵を回収できるように、産卵直後に金魚網ですくって卵を回収しました。しかし、残念ながらこの方法では受精率が低く、うまくいきませんでした。そのため、他の個体に少々食べられるのは仕方ないとあきらめ、排水管に金魚網と塩ビ管などで作った特製の採卵器をセットして卵を集めました。受精率の高い卵は集められるようになりましたが、試練はまだまだ続きます。実験室でえさとしてL型ワムシを使って仔魚の育成に取り組みましたが、えさや環境が合わなかったのか、何度やっても最長11日齢までしか育てることができませんでした。



アカオビハナダイの仔魚

ブレイクスルー!

なかなかうまくいかない日が続く中、「アカオビハナダイ等魚類の種苗生産に関する共同研究契約」を海水魚育成の高い技術と設備を持つ神畑養魚株式会社と締結しました。2025年9月4日と5日に生まれた受精卵を、神畑養魚株式会社 南九州養殖センター(鹿児島県南九州市)に車で2時間かけて輸送しました。同センターでは、持ち込まれた稚魚を水量の多い水槽に収容し、L型ワムシよりも小さいカイアシ類のノープリウス幼生を初期のえさとして使って育成を試みました。その結果、アカオビハナダイの稚魚育成に成功し、300匹の稚魚を得ることができました。その後、50日齢で一部の稚魚を当館に戻して育成しました。



孵化後31日齢 全長1.5cm

今回の成功と今後の取り組み



孵化後127日齢 全長2.5cm

神畑養魚株式会社と協力することで、世界で初めてアカオビハナダイの稚魚を育成することに成功しました。これは、野生資源を減らすことなく展示・飼育を続ける仕組みを作るための重要な一歩です。さらに、この成果は、他のハナダイのなかまへの応用や、将来的な生物多様性の保全・再生技術への発展にもつながると期待できます。今後は安定した稚魚の育成や水族館内での稚魚の育成に取り組んでいきます。(柏木 伸幸)

とくべつ きかくてん 特別企画展

HITODE★EXPO 2026

かごしまヒトデ博覧会

2026年7月17日(金)~11月3日(火・祝)



独特で不思議な形、彩り豊かな体色、水族館ではタッチ体験でも人気者—そんな“海のスター”ヒトデが、この夏かごしま水族館に大集合!誰もがその名を知るほど有名な生きものですが、水槽ではいつも脇役になりがちなヒトデが今回の主役です。

ヒトデのなかまは浅海から深海まで、そして暖

かい海から冷たい海まで世界中に生息しています。世界では約2000種、日本近海だけでも約300種が確認されており、その姿かたちはさまざまです。磯や干潟で遊んでいるときに見つたり、当館のワクワクかんさつプール*で触ったりした経験を持つ方も多いのではないのでしょうか。ヒトデは意外と身近な生きものかもしれません。

さて、皆さんはヒトデについてどれくらい知っているでしょう。今回の特別企画展では、ヒトデの不思議な体や生態にスポットを当てながら「目や口はどこにある?」「どうやって歩く?」「骨はある?」「毒はある?」など、知っているようで知らないヒトデの秘密を紹介します。夏休みの自由研究にもぴったりな「HITODE★EXPO 2026 かごしまヒトデ博覧会」は7月17日、まもなく開幕です。海のスターが一室に会えるこの機会をお見逃しなく! (二階堂 梨沙)

*令和7年12月にタッチプールは「ワクワクかんさつプール」に名称変更しました。

いおワールド 通信

かごしま国際大学 × かごしま水族館

なぞと謎解きイベント

2月7日、14日の閉館後、鹿児島国際大学日本語学ゼミと共同で体験型謎解きゲーム「青色の手紙～約束の場所は水族館～」を開催しました。共催の謎解きイベントは今回で3回目です。「待ち合わせ場所に来なかった友だちが残した手紙に書かれている謎を手掛かりに、水族館内のどこかにいる友だちを探す」というストーリーでした。最後の謎はそれまでの謎の用紙を折り紙のように折って答えを導く難題で、お客さまは家族や友だちと協力しながら夢中になって解いていました。学生たちが忙しい合間を縫って映像や劇を制作したおかげで、お客さまから大人の方まで満足できるイベントとなりました。



(杉山 球華)

Myユウユウ

かごしま水族館からアプリが登場！その名も「Myユウユウ」。色や性格がランダムで出てくるジンベエザメの「ユウユウ」にえさをあげて「ペビ」から「おおさま」まで育てるゲームです。館内に設置している二次元コードを読み込むとえさのプランクトンをゲット！えさはレア度によりノーマル・レア・幻の3種類があります。他のユーザーと友だちになってえさをおすそ分けしたり、自分のユウユウが泳ぐ「My海流」に招待したりする交流機能も充実！ログインボーナスで手に入る「色変えプランクトン」を使って、体や斑点を好きな色にカスタマイズしたり、「おおさま」まで成長するとメガネや帽子などをコーディネートしたりすることもできます。皆さんも世界に1匹の自分だけのユウユウを育ててみませんか。



(三重 拓)

シリーズ 鹿児島 未だの魚を発見!

No. 43 ツバサキントキ

本種はこれまでハワイやメキシコなどから知られていましたが、口之島と与論島から漁獲された個体に基づき、2025年4月に日本初記録として報告されました。本種の和名は近縁種と比べて胸鰭が長いことに由来します。



ツバサキントキ *Plectranthias alalaua*

No. 44 アカネキントキ

これまでアカネキントキはインド・西太平洋に広く分布すると考えられていましたが、インド洋と西太平洋でそれぞれ別種であることが明らかになり、日本を含む西太平洋の種は2026年4月に新種として記載されました。アカネキントキは鹿児島県内では甞島列島、薩摩半島西岸、鹿児島湾、大隅半島東岸、奄美大島の水深100メートル以浅から記録されています。(鹿児島大学総合研究博物館 館長 本村 浩之)



アカネキントキ *Plectranthias starnesi*

編集後記

以前、読者の皆さまにアンケートを実施した際、とても多かったのが「水族館の仕事を知りたい」でした。そのリクエストにおこたえして、109号から6回にわたり各係の仕事を紹介してきました。総務の仕事、学習交流係の仕事、魚類展示係の仕事、海獣展示係の仕事…そして今回は館長の仕事でした。いかがでしたか。まったく違う仕事の内容に驚かれたかもしれません。しかし、立場や専門性は違っても、その根底に共通して流れているのは「生きものをより多くの方に知ってもらいたい」「お客さまの笑顔が見たい」という思い。この思いが水族館を形作っています。水族館の仕事を紹介するシリーズ、もう少し続きます。どうぞお楽しみに。(大塚 美加)

